

元暁の『金剛三昧經論』に於ける論理構造の特色

——無二而不守一思想——

佐 藤 繁 樹

新羅元暁大師（617—686）が『金剛三昧經』¹⁾を論釈した『金剛三昧經論』²⁾は現存著書22点中、最も分量が多く、貴重な文献にして、唯一な禪經論書³⁾とすることができる。

『金剛三昧經』は水野弘元先生によって、648年以後665年頃迄に中国で撰述されたもので、入實際品中に見える二入論の思想は菩提達摩の二入四行論より影響をうけたものである⁴⁾と発表されて既に久しい。周知の如く、こうした考えは学界の認める所となっており、金剛三昧經は仏説の權威を借りて達摩の二入四行論の思想や道信・弘忍などの東山法門系の守一思想などを宣揚する為に書かれた經であると言われている⁵⁾。しかし、元暁の『金剛三昧經論』の思想による限り、そうみるのは難しい。この金剛三昧經には、南北朝から隋代当りの中国で問題となった殆んど全ての教理学説が網羅されていると言われる⁶⁾。それは何故かと言うと、この經の根本思想が一味真実の世界を明らかにして一人りも洩れなく帰一心源する事ができるようにすることにあったからである。その為には仏教の根本諸思想を綜合して、絶対空の真理界を確實なものとし、すべてのものに絶対的な確信を与える必要があったからにほかならない。

ところで、元暁は經の根本思想である一味真実の世界を端的に無二而不守一という思想構造によって表現した。この事は元暁がこの經を終始一貫して無二而不守一思想を以て論釈した事を表明しており、この事から彼の『經論』に於ける論理構造の特色が無二而不守一思想にあったことを物語っている。而も一味真実の世界を無二而不守一思想をもって表現した事は、元暁の根本思想が無二而不守一思想にあったことをも同時に示した事になる。従って、無二而不守一という思想的立場を自らの眞の主体とした經と元暁とは、明らかに達摩の二入四行論の思想や守一思想などの立場と一線を画したものと考えなくてはならない。

そこで、『經論』の論理構造が無二而不守一という思想構造にある事を論証することになる。最も茲では、經論全体に亘って論証する余地をもつことができないので、無二而不守一という思想構造の成立を明確にした眞性空品の一四句

偈⁷⁾、經の大意である一心之源と三空之海⁸⁾、及び入實際品中で展開された三空の論理⁹⁾などから、その論理構造の特色が無二而不守一思想にあったことを論究することに止めたい。

真性空では、利根の者の為は無二而不守一中、無二即ち、絶対空・能所平等無二処が徹底して説かれるのに、鈍根の者の為には、因縁所生義・是義滅非生・滅諸生滅義・是義生非滅という一四句偈が説かれた。經では、一切仏法攝存一偈中、と言い、元曉は仏法之要在此四句と言った。この四句にこそ經の根本要諦があると把えた元曉がこの四句を熱心に説明する処で、經論の論理構造の特色である無二而不守一という用語をたった一度使ったところには、すでにこの經の全体思想に対する論理構造の総結として構想されていたものと考えられる。元曉は前二句を融俗為真、平等義（不守一而無二）、後二句を融真為俗、差別門（無二而不守一）と論釈した。更に真俗無二而不守一、由無二故即是一心、不守一故拳体為二、如是名為一心二門、大意如是、と言った。これによれば、『大乘起信論』の一心二門を土台としてこの無二而不守一という思想構造が成立した事が分る。一偈摠別之義では、生即寂滅而不守滅、滅即生而不住生、生滅不二、動寂無別、如是名為一心之法、雖実不二而不守一、拳体隨縁生動、拳体隨縁寂滅、由是道理、生是寂滅、寂滅是生、無障無碍、不一不異と謂った。この無碍自在な生滅の論理が無二而不守一・不守一而無二の成立根拠となった論理とすることができるこの構造は永遠に滅することのない真実な世界を表現した構造である。この構造は自己の真の主体であり、仏の心的構造であり、法の究極した本質的な在り方でもある。三空の論理をみると、空相亦空を俗諦中道、融真為俗（無二而不守一）とし、空空亦空を真諦中道・融俗為真（不守一而無二）と元曉は説明したから、これら二つは各々一偈の差別門・平等義に該当し、所空亦空は一心一法界で、非真非俗無辺無中之中道とした。これは一偈を摠括した一心法に当る。従って、三空の論理と一偈とは無二而不守一・不守一而無二、平等而差別・差別而平等を構造とした論理で同義である事が分る。而も三空の論理は入實際品思想の中核とみることのできる論理である。

經の大意である一心之源では、離辺而非中、非中而離辺とあり、前者の論理は有無・是非の無碍自在を表現したものであり、後者の論理は不有即不無・不無即不有である。この事は不有不無而有無・有無而不有不無を表現した論理で、この構造は無二而不守一・不守一而無二である事が分る。茲に言う不有之法・不即住無・不無之相・不即住有は、三空を説く經に出る。茲の元曉の説明をみると、一

偈と三空の論理の説明と同じ論法であるから、この一心之源も亦一心一法界を表現したもので、無二而不守一思想に基いた事も明白である。

經の大意である三空之海は三空の論理の説明と全く同じで、融二而不一・不一而融二とある。前の論理は真俗染浄が無導自在である事、後の論理は非真即非俗、非俗即非真である事から一心之源の論理と同じである。茲も無導自在なのは、その論理が非真非俗而真俗・真俗而非真非俗を表現したからである。これらも又無二而不守一・不守一而無二を構造としたものであることが分る。

以上から一心之源・三空之海・三空の論理・四句の論理も皆なすべて無二而不守一思想を根本とした事が分る。元暁の『金剛三昧經論』は汲めども尽きない珠玉の思想に満ち溢れているけれども、今は最も重要と考えられたものの中から若干を選び、經の根本思想並びに經論の論理構造の特色を無二而不守一思想にある事を論証したにすぎない。この無二而不守一・不守一而無二という構造は妙覺無住地¹⁰⁾と言われるように、仏の心的構造を顕わし、無住の構造でもある。經で仏教無住之證と言ったのを、元暁は不住二諦(無二)而不在中(不守一)雖不在中(不守一)而離二辺(無二)¹¹⁾、と論釈した事から明白である。元暁は無二に偏らず、不守一に傾かない無二而不守一と言う思想構造に經の根本思想をみたのみならず、元暁思想の核心である和諍の成立根拠となったものである事から考えても、この構造は元暁哲学の根本思想を端的に表現した構造という事が出来る。

1) 大正九, pp. 365 c - 374 b

2) 大正三十四, pp. 961 a - 1007 c, 韓国仏教全書, I. pp. 604 b - 677 b

3) 李箕永, 元暁思想の独創的特性, 韓国精神文化研究院, 1991.

拙稿, 『金剛三昧經論』, 「六波羅密」思想を通して見た元暁の真禪思想, 92, 10.

4) 水野弘元, 菩提達摩の二入四行論と金剛三昧經, 駒沢大研究紀要 13号, 1955, pp. 33-57.

5) 柳田聖山, 達摩の語録 I, p. 38.

R. E. Buswell, "The Formation of Ch'an Ideology in China and Korea", 1986.

6) 水野弘元, 印仏研, 通巻第6, 1955.

7) 真性空品一四句偈, 大正 34, pp. 995 c - 996a, 韓国仏教全書 I. pp. 658 c - 659 a.

8) 第一述大意者, 大正 34, p. 961a, 韓国仏教全書 I, p. 604 b

9) 入実際品三空, 大正 34, pp. 983 c - 984 b, 韓国仏教全書 I, pp. 639 b - c.

10) 大正 34, p. 979 b. 韓国仏教全書 I, p. 633a.

11) 大正 34, p. 999 b. 韓国仏教全書 I, p. 664 b.

〈キーワード〉元暁, 『金剛三昧經論』, 論理構造, 無二而不守一思想

(東国大学校大学院修了)